

文庫便り 50号を迎えて スタッフからのひとこと

沙羅の樹文庫ができた時すぐに私は「押しかけお手伝い」をお願いしました。定年後の終の棲家を選んだこの地で文庫に出会えたこと、文庫にくるたくさんの本好きの人たちに出会えたことは、私の人生の最終章の最高の幸せです。

(中西景子)

海、山、空、花、動物。私の願っていた老後が伊豆高原で全部そろうた!!ん?何か足りない。そう本だ!!

4年程前、文庫がオープンして私の理想とする生活が実現しました。今本当に文庫に感謝!!お手伝いをして4年になりました森川です。

(森川理恵)

先輩中西さんのお誘いで参加したのに始まり、今では生活の一部にもなっている。会員の生き方や読書意欲に刺激され、自ら楽しみながら出来る限りのお手伝いをしたいと思う。児童書への関心は文庫で得た収穫の一つ。

(高橋良子)

河津町から毎月やって来る稲本温代と言います。沙羅の木を見てほっとするひと時。そして、そこで多くの方々やお子さん達との触れ合いは、私にとって、とても嬉しい空間です。今後とも文庫同様よろしくお願い致します。

(稲本温代)

スタッフに自己紹介をとお願ひしたら、上記のメールが届きました。でも皆さん既にご存知ですね。文庫を開館したときは思いもかけなかった力強いスタッフを得て、文庫は続いています。4人の方をはじめ、何かとサポートしてくれるおはなしの仲間、会員の皆さんを目に浮かべ楽しんで作り続けています。これからも皆さんの助けをお借りして、少しでも喜んで読んでいただける文庫便りにしていきたいと思ひます。

(西村敦子)

そして、嬉しいご意見もいただきました!

最近の沙羅の樹文庫の盛況ぶりは目を見張るようです。(人の多さ、蔵書がふえたこと)で、それに伴い本を選びにくくなり、高所にある文庫ももっと見やすい所においてももらえるといいなと思ひます。(場所が限られてるのを承知の上の厚かましいお願い。)

(天羽喜代子)

◆けが人の出るまえに?、ご希望に添いたいとは、常々思っているのですが、何分通いで個人の賄いですので。出来るところからをモットーにしております。お知恵拝借♥

これからの催し物は!

★クリスマスおはなし会・おたのしみ会★

12月19日(日)10:30AM~12:00

会員ならどなたでも。ひとつ300円程度のプレゼントをご用意ください。

◆◆今後の開館スケジュール◆◆

◆11月は通常と違います。13日(土)、14日(日)

◆12月は18、19日の通常開館です。

◆2011年1月は通常15日(土)、16日(日)

※文庫の時間:土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

※毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。

午前10:30~11:00

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》
みんなで勉強会(おはなし・沙羅)

★11月は13日(土)AM。クリスマスの練習。

文庫あれこれ◆10月に入って暑い日はあっても東京ではどこからともなく金木犀のかおりが漂い、秋を感じさせてくれましたが、このあたりでは?◆2年に1度ある「全日本語りの祭り」に参加して、山形県新庄市に行ってきました。民話がいまだ生活に根づいていました。芋汁とお漬物がおいしかったです。◆芭蕉が俳句にしたためた最上川を船くぐりました。紅葉には少し早いようでしたが、川風に吹かれよい気持ちでした。川の片側は、クマ、カモシカ、タヌキ、いろいろな動物がまだたくさん棲息しているのか。くるみの木がクマにやられて枯れかけていました。◆今は運動会を春やってしまうところもありますがこのあたりは?先日3歳の孫の運動会で、じじばば参加のゲームがあり、チームを優勝に導くほどの活躍をした!?とのことで、閉会式に壇上にひとり上がり、ごほうびになんと新米5キロいただきました!前日カイロプラクティックに行ったおばばでしたが、ちょっと頑張っちゃいました。◆今年も暮れかかってきました。あと2ヶ月半!!何冊すきな本に出会えるでしょう。お風邪など召さないで読書を楽しんでください。今年は国民読書年です。ご存知でした?(西村)

沙羅の樹文庫便り

No.50 (2010年10月号)



ネットから無断借用しました。

わが心澄めるばかりに更けはてて
月を忘れて向かう夜の月
(花園院・歌『風雅集』(大岡信撰『折々のうた』より)

仲秋の名月は過ぎたけれど…(10月は23日満月)
月にちなんだお話はたくさんあります。月の兎をはじめ、月の満ち欠けを、お月さんが、たくさん美味しい食べ物をご馳走してくれるやさしいおばあさんと少ししか食べさせないけちなおばあさんの間を行き来することに例えた話。暗い夜を何とかしようと月を取りにいくな話、など等。今回の秋の夜長のおはなし会(16日夕)にも月のおはなしがいくつか、あります。お琴の調べもあります。聴きにきてください。

文庫便りが50号になりました。書評・紹介文をお寄せくださるみなさん、ありがとうございます。知恵もアイデアもなしに、いつも慌てて作っているの、誇れるものではないのですが、ともかく開館して、2ヵ月後から毎月作って50号になりました。

連絡先: 沙羅の樹文庫

電話 0557-51-3737

灰色の煙と緑の煙

ウズラ・ヴェルフェル作
野村 法訳 (岩波少年文庫)



『灰色の煙と緑の煙』

ウズラ・ヴェルフェル作
野村 法訳 (岩波少年文庫)

これは、『本の虫ではないのだけれど』(清水真砂子著 かがわ出版)の冒頭に載っている「最後の授業」での推薦の一冊の本です。

14の短編から編まれ、人が一緒に生きる事の難しさについて語られています。14のお話には解決はありません。わたしは、「童話・絵本」のなかで、子どもたちは、本能的に自分の今があるがままにしかと受け止めてくれる物語、そしてこれからも元気に歩いて行けるように語られている物語を、面白い(安心)と感じ「往って還る」経験を繰り返す……と考えていました。還る場所がなかったら、だれも飛び立つ事が出来ないではないか、ハッピーエンディングの深い意味のひとつはここにあると思っていたのですが、この本は必ずしもめでたく終っておらず、話の解決は読者がめいめい自分でつけなくてはならない本なのです……。童話は一般的に言えば「世の中がこう有ってほしい」「読後幸せをたっぷり感じてほしい」と言う願いに答えようとしています。この本が出版された1970年、西ドイツの児童文学の世界では、これはそういう願いに反するとして、激しい論争の渦を巻き起こしたそうです。

この本の問い掛けは、『なぜ貧乏人と金持ちの人がいるの』『なぜ人間は何度となく戦争をするの』『皮膚の色による差別が何故あるの』『孤独な老人たちは……』『両親の離婚……』など、小さな読者、いや大きな読者にも真摯にあるがままに認識させようと、緊張感のある文章で訴えてきます。14のお話は、人のこころを揺り動かし、ものを考えさせてくれます。

ちなみに翻訳者の当時小学6年生の息子さんが「ああ、面白かった、という本じゃない。あとで考えずにはいられなくさせられる。こんな本読んだことない。」と、言われたそうです。多くが抱えている問題を鮮やかに切り取った作品の内容は、ひとつひとつが決して昔の話でなく今日のわたしたちに話しかけてくるもので、そして、それらすべての人生を心から尊びたいと思いました。

最後に「往きて還りし物語」の数々……ひとつひとつの家から物語が失われ、『出発する場所』『還る場所』を確認できない子ども達に読んでもらいたい、「沢山の体験」は物語を読む事によって出来上がっていくと……思っているのです。(田畑 木利子)

『WALK TWO MOONS』Sharon Creech 著

(邦題:めぐりめぐる月 偕成社刊)

13歳の少女サラマンカ(通称Sal)は母からインディアンの血を受け継いでいる、ひとりっこでした。4月のある朝、Salの母は突然、家を出て行きました。チュリップが咲くころには戻るからと約束して。しばらくしたある夜、母がもう戻らないという知らせが入りました。母に会うため、Salは母から送られた手紙をもとに、その足跡をたどって、父方の祖父母と3人で、オハイオ州ユークリッドから、母の向かったアイダホ州ルーイストンまでの2000マイルをドライブすることになります。1週間後の母の誕生日に間に合うように。祖父の運転する車の中で、退屈しのぎになる話はないかと持ちかけられ、Salは親友フィービーの家族に起きた出来事を話すことにしました。

物語は3人のドライブ旅とこの親友フィービーの話とともに進んでいきます。

フィービーの話の中で、Salはフィービーと自分の状況、心境を重ね合わせ、自分や周りのひとたちを見つめ直していきます。そして次第にこの2000マイルの旅は、Salにとって、大きな事を理解し、納得していく旅となります。物語は二重に進行しており、両者とも話の展開が興味深く、最後まであきることはありません。

大らかでユニークな祖父母の存在は、長旅中Salだけでなく読者をもなごませてくれます。その他、個性豊かな人物たちの登場それぞれが持つ事情や、Salの育ったケンタッキー州パイバンクスの豊かな自然情景は、読者の想像力を掻き立てます。13歳ならではSalやフィービーの想像力・行動力はこの年代らしいパワーを感じ、自分の少女時代が懐かしく思えました。Salの語る自分の正直な心境には親しみがわき、また周りを困惑させる言動や行動を起こすフィービーの心境も憎めません。突然起こった出来事に対するどうしようもなく不安定な気持ち、現況を受け入れられず素直になれない気持ち、大事な人を失いたくない気持ち、人間誰しも経験しているのではないのでしょうか。本の対象年齢は8-12歳ですが、大人の方にとっても読み応えがあります。いくら考えても納得できない、気持ちのやり場がない、そんな時に心を安らげてくれる本かも知れません。(Shino Yamamoto)



新しくいった本

子どもの本

『ティナのおるすばん』(イリーナ・コルシュノフ作 徳間書店)『うしろの正面』(小森香折作 岩崎書店)『ゆうかんなハリネズミマックス』(D.キング=スミス作 あかね書房)『スチュアートの大ぼうけん』(E.B.ホワイト作 あすなろ書房)

『チム・ラビットのぼうけん』(アリソン・アトリー作 童心社)『子どもべやのおぼけ』(カーリ・ゼーフェルト作 徳間書店)『人間になりたがった猫』(ロイド・アリグザンダー作 評論社)★ここまで、低学年~中学年向き

『だれも寝てはならぬ』(ガス・ニクスほか著 ダイアモンド社)★高学年~ 『アナザー修学旅行』(有沢佳映著 講談社 2010)★ヤングアダルト~

大人の本

『ひそやかな花園』(角田光代著 毎日新聞社 2010)『昔日の客』(関口良雄著 夏葉社 2010)★前号紹介の『夕暮の緑の光』著者らが愛した古書店主のエッセイ)『よそ見津々』(柴崎友香著 日本経済新聞出版社 2010)『寝ても覚めても』(柴崎友香著 河出書房新社 2010)『孤鷹の天』(澤田瞳子著 徳間書店 2010)『絵本ありがとう』(足立茂美著 今井出版)

以下、大人の本、いただきました。

『夕映え少女』(川端康成著 新風舎)『世界の中心で愛をさけぶ』(片山恭一著 小学館)『マークスの山』(高村薫著 早川書房)『弘海』(市川拓司著 朝日新聞社)『ラスト・チャイルド』(ジョン・ハート著 早川書房)『橋をかける』(美智子皇后著 すえもりブックス)『運命に従う』(小川亜矢子著 幻冬舎)『梅桃が実るとき』(吉行あぐり著 文園社)『八十歳の遺言』(佐々木初子著 叢文社)『結局、アメリカの患部ばかり撮っていた』(楠山忠之著 三五館)『読むドキュメンタリー映画』(楠山忠之著 風塵社)『ドクターからの手紙』(佐藤英一著 サンガ)『人はなぜ動物に癒されるのか』(アレン・M・ショーン著 中央公論社)『黒猫ひじき』(西村玲子著 ポプラ社)『イギリス・カントリー四季物語』(土屋守著 東京書籍)『イギリス四季暦』(出口保夫著 東京書籍)

『シュガータイム』(小川洋子著 中公文庫)『そんなときは彼によるしく』(市川拓司著 小学館)『容疑者Xの献身』(東野圭吾著 文春文庫)『高峰秀子の捨てられない荷物』(斎藤朱美著 文春文庫)『オーケストラの職人たち』(岩城宏之著 文春文庫)『あの世の話』(佐藤愛子・荻原啓之著 文春文庫)『あぐり95年の奇跡』(吉行あぐり著 集英社文庫)『わが軍師論』(佐々淳行著 文春文庫)『奇跡の指先』(福島孝徳著 PHP文庫)『カルテの裏側に』(石川恭三著 集英社文庫)ほか